

セネガルにおけるイスラム教徒の葬儀

0 はじめに

今般、西アフリカ各地で猛威を振るっているエボラ出血熱について、爆発的な感染の拡大の一因となったのが、一部地域で実践されている葬儀の際の風習だと言われている。葬儀に際して近親者が遺体を洗い、参列者たちも遺体に触れ、抱きつき、キスマでするのだという¹。セネガルにおいては、近隣国でのエボラ出血熱流行に際し、この国では葬式の際にこういったことを行う風習がないので、被害は他国ほど深刻なことにはならないのではないかという声が各方面から聞かれた。それでは、セネガルの葬儀は実際にはどのように行われるものか、人口の95%を占めるイスラム教徒の慣習に的を絞って概観することとしたい。

1 書類手続き

一般にイスラム教徒の葬儀は簡素であると言われる。誰かが死亡すると、まず医師による検死が行われ、死因を証明する書類が発行される。その後、役所に申請して埋葬許可証が取り付けられる。ただし自宅で死亡する者の多い農村部などでは、死亡診断書は省略されることも多いし、埋葬許可証の取り付けさえあまり厳密には行われていないという。それとは別に死亡届も存在するが、これは即日提出されることもあれば、相続の関係で大幅に遅れて提出されることもある。

2 遺体の洗浄

一般にイスラム教徒は清潔を非常に重んじる。これら書類上の手続きと並行して迅速に行われるのが、遺体の洗浄である。モスクの裏などに遺体洗浄のためのスペースがあり、専任の遺体洗浄人が存在する。年配者が多いという。死者が男性であれば男性が、女性であれば女性が遺体を洗う。遺族は彼らに謝礼を現金で支払う。金額は定められておらず、「気持ち」で良いとのことである。実際は1000～5000Fcfa程度を支払うことが多いようだ。死亡時刻が正午であるとすれば、遅くとも夕方には遺体洗浄は完了していることがほとんどであるという。つまりはセネガルにも遺体を洗うプロセスは存在するのであり、もしエボラ出血熱が蔓延すれば、遺体洗浄人たちはさぞかし恐怖することであろう。ただし、イスラムの教えとして、「死因が疫病である場合、遺体洗いは省略しても良い」という決まりも

¹ ただし、エボラ出血熱の被害が深刻である地域はギニア、シエラレオネ、リベリアにまたがっており、三か国の全域で万遍なくこのような風習が実践されているとは考えにくい。それにもかかわらず、あたかも西アフリカ一帯でこのようなことが行われているかのような風説が広がり、偏見や恐怖を助長していることには違和感を覚えざるを得ない。

あるのだという(文末の付記を参照)。

3 埋葬

洗浄された遺体は白い布でぐるぐる巻きにされる。全身を隙間なく包み込んでしまうので、これ以降死者の顔を見ることはできない。遺体はぐるぐる巻きの状態で(棺桶は用いられない)すぐに墓地に運ばれ、埋葬される。イスラム教徒の墓は日本の仏教式と異なり、一人一基であるが²、家族の者同士は大抵隣り合って埋葬される。なお、死因が疫病である場合は、白い布の上からビニールで遺体を覆う、墓穴を通常より深く掘るという措置が取られる場合もある。遺体を運び、埋葬するのは親族の男性たちの仕事で、女性はこれに加わることはできない。埋葬に際してはイマームが同行し、祈禱を行う。死亡時刻が正午であれば、早ければ夕方には埋葬が完了している。書類の取得に時間がかかりすぎるなどの理由がなければ、遅くとも翌日には埋葬まで完了していることが多い。

4 葬儀

こうして遺体は真っ先に埋葬されてしまうので、葬儀は遺体なしで行われる³。親族や友人知人、近所の人などが集まるのは死亡当日から数えて3日目である。ウォロフ語を話す地域であれば、弔問客は遺族に「Siggil ndigalé (シッギル・ンディガーレ)」とお悔やみの文句を述べ、遺族は「Siggil sa walleu (シッギル・サ・ワル)」と返す。訳そうと思っても訳しようがないとしか言いようのないフレーズであるが、実はセネガル人もよく意味を知らないという。服装については、日本のように黒い服を着るなどの決まりはないが、あまり華美なものとは慎むべきである。弔問客は遺族に香典を渡し(こちら金額は「気持ち」で良い。農村部では米や布など品物がやり取りされることも多い)、ごちそうが振舞われる。メニューはチェブ・ヤップと決まっており⁴、羊や牛の解体に始まり、親族や近所中の女性たちが動員され、いくつもの大鍋で米が炊かれる。また、死亡から数えて8日目にも同様の行事が行われ、親族や近所の人などが集まる⁵。3日目と8日目の葬儀に際してはイマームが弔問に訪れ、祈禱を行うほか、遺族や参列者の前で説教を行う。それ以外の日においても、イマームは頻繁に弔問に訪れ、遺族の精神的な支えとなる。

² そのため、特に大都市において墓地不足が深刻化している。

³ キリスト教徒は日本の一般的な葬儀のように、棺に収めた遺体と一緒に葬式をする。伝統宗教(セレール族の一部やカザマンズ南部のマンジャック族、ソーサー族の一部など、人口の1%が信仰している)においても、遺体ありの葬儀をするという。

⁴ 「魚ごはん」のチェブ(米)・ジェン(魚)に対し、こちらは「肉ごはん」。セネガルでは結婚式、命名式等の慶事から凶事まで、親族や近所の人が集まる行事の際のメニューはチェブ・ヤップと相場が決まっている。

⁵ 3日目と8日目の2度にわたって弔問客が集まる慣習は、キリスト教徒においても共通のものである。

5 服喪

死者が既婚男性である場合、その妻は4ヶ月と10日間にわたって喪に服することを求められる。彼女たちはベールで髪や体を覆い、ほとんど部屋に籠もりきりで生活しなくてはならない。また、日本の「四十九日」に相当する法要が死去から40日目に開催される。

6 墓参

女性は埋葬に参加することはできず、そもそも墓地への立ち入り自体があまり奨励されていないが、実際には墓参りを行う女性は少なくない。墓参りにおいては、日本のように花や供物が供えられることはなく、行われるのはコーランの詠唱である。

7 セネガル人の死生観

セネガル人は日本人に比べると、感情を大らかに表に出す人々である。誰かの訃報に接した人々が声を挙げて泣き叫ぶ姿は珍しいものではないが、セネガル人は葬式となると意外なほど涙を見せない。人の死もまたアッラーの下す決定であり、それに従わずにいつまでも嘆き悲しむのは罰当たりなことであるというのがイスラムの教えである。子どもを亡くした母親ですら、一見したところでは淡々と日々を暮らしているように見えるものである。

日本人はセネガルで友人や知人の訃報に接すると、まず「なぜ？」という問いを発しがちである。若い元気な人が急に亡くなるのが珍しくないこの国では、我々はまず死因を知りたいと思ってしまうものである。するとセネガル人は「なんという愚問を、この日本人は」と言わんばかりに、「なぜって、アッラーがそう望んだからだ」と答える（「事故にでも遭ったのか」「長いこと病気だったのか」などという訊ね方をすれば、死因についても聞かせてもらえる）。不幸に際してもひたむきにアッラーの意思を信じ、従おうとする彼らの姿には胸を打つものがあるが、それだけに、アッラーの決めたことに畏れ多くも異議を差し挟むかのように「なぜ？」と問うことは、無遠慮な行いと捉えられるのかもしれない。

8 付記：イスラムと衛生観念

上述の通り、セネガルでは人が死ぬとまず遺体の洗浄が行われるが、死因が疫病である場合、この過程は省いても良いとされる。また、エボラ出血熱の流行に際し、セネガルはじめ西アフリカ各国が国境閉鎖等の措置を取ったことが物議を醸しているが、セネガル国内では一部のイマームが「疫病の流行に際して交通を遮断することはイスラムの教えに適っている」と主張している。

イスラムの教えや戒律は、日本人からは必要以上に厳しく物々しいばかりであるように思われがちだが、衛生という観点からは実に合理的にできているものである。豚肉を食べないのは余程気を付けて火を通さないとすぐに食中毒を起こすからと考えることができるし、死んだ動物の肉やどのように屠殺されたか定かでない肉を食べてはいけないのも、殺

2014年9月26日
文責：内山 智絵

してすぐに血抜きが行われなかった肉を避けるための方策と考えることができる（屠殺後すぐに血抜きされなかった肉は腐りやすい）。

一日 5 回の祈りに際し、手足だけでなく目、口、耳の中まで洗うのも、もちろん衛生上たいへん望ましいことである。セネガル人の食事の前の手洗いは、ことに貧しい家庭などでは家族全員が同じボウルに手を突っ込んでバチャバチャと洗う程度のもの（そして、手洗いの方法が簡略な家ほど、食事を手づかみで食べる傾向にある）、青年海外協力隊員などが「手洗いは流水とせっけんで」と懸命の啓発活動を行っても馬耳東風であるにもかかわらず、お祈り前の手洗いをこのように罰当たりな方法で行う者は皆無で、皆当たり前のように蛇口や水差しからのきれいな流水を使う。また、セネガルでは年中砂埃が舞っている気候のせい、眼病で目やにを一杯にためた子どもをよく見かけるが、これらは大抵まだ祈りの習慣のない小さな子どもたちである。さらに、アラビア半島の住人が歯を磨くようになったのはイスラムの普及後であるという説も存在する。